

松江と鱸^{すずき}

平成24年10月1日
藤井統之(35年卒・11期)

松江鱸の記憶を訪ねて

今年正月家族旅行で上海に行った際、1998年に上海の市轄区となった松江(以下「松江」)を訪ねた。以前、「中国江南の松江(sōngjiāng)に、白瀉や鱸(すずき)を産する自然環境が類似するところから松江と命名したと言う説(島田成規『松江城物語』)」に言及した一文を書いたので一度見ておきたかった。上海市の南西、黄浦江の上流に位置する「松江」は、最近地下鉄もつながった。今や「松江」は、かつて自己の属県であった上海のニューフロンティアである。だが、松江府時代のコンセプトつまり国内外に聞こえた綿織物生産及び水運交易の中心地、「魚米の郷」としての在り方、文人や科擧の合格者を輩出した文化的教育的伝統等を継承することで、「松江」に一定の敬意が払われているようだ。復旦大学視覚芸術学院や上海外国語大学など10校もの大学が続々と移転・新設してできた学園都市もその一つである。人口はまだ清・嘉慶年間の56万余とほぼ同じである。当時、松江府では家内紡織従事の農婦から官吏や教師に至る様々な業種で“終歳勤動”という「勤勉革命」が起こっており、業種によって異なるが、年360から330日前後働いていた(李伯重「終歳勤動」2008)。

地下鉄9号線の終点、「松江新城」駅で降りると、がらんとした空のよく見える空間が広がる。待ちタクシーに乗り、運転手に古い街(老街 lǎojiē)へ行ってくれと頼んだ。年のころ四十ぐらいの運転手の家は、もと漁業を営み祖父の代までそのあたりの漁場の大地主であったとか。上海は以前は灘(滩 tān)だったと問わず語りに言う。わが松江の灘町が頭に浮かんだ。「外滩(ワイタン)の灘だね。」と合槌を入れる。その後、松江の地名の由来と「松江鱸」の話の切り出し現状を訊いたところ、「鱸魚の話まで知っているとは！」と一瞬驚きの表情を見せ、「もういないよ。」とぼつりと言った。

案内のままに唐代の経幢(キョウトウ)に立ち寄り、宋代の九重の方塔のある閑静な公園でくつろいだ後、日没を気にしながら以前地図上で見かけた松江二中、三中などを確認しそそくさと回る。フィニッシュはすっかり日が暮れたが、明代に築造された石造アーチの大倉橋に着く。五孔の太鼓橋の階段を登り、てっぺんから水都の風景を撮影。大倉橋の南は、綿織物などの漕運倉庫街である。明・宋應星の『天工開物』や清・康熙『松江府史』に

綿織物は「どれも松江が天下第一(「皆為天下第一」)」、「紡織は松江を尚ぶ」(「織造尚松江」)、などと記載された往時の名残を留める大倉橋である。松江区商務・旅游部門の資料に、「橋の原名は永豊、橋の南は松江府の漕運倉庫街であったので、俗称を大倉橋という。」と



【写真】月下の「鱸卿遺韻」2012.1.9

ある。橋の南とは月の位置からして写真の右手であろう。視野には入らないが前方には秀野橋がある。秀野橋から大倉橋にかけての河道は、「鱸郷遺韻(ロキョウイン、韻は韻の異字体)」と言われ、「松江老十二景」の一つである。天神川に雰囲気が似ていると思った。

松江鱸を作った逸話

わが松江開府前後、明末の「松江」は、首都に次ぐ15の「府」の一つとして繁栄を極めた。蘇州府と松江府の財貨と賦税は天下を分かつという「蘇松財賦半天下」のフレーズは、当時の松江府の隆盛の形容にしばしば使われている。松江府は当時、総面積で蘇州府の三分の一しかないがコメの収穫高と納税額は蘇州の半ばに達すると言う。この繁栄が、風が吹けば桶屋が儲かる式に鱸郷を造ったと言うから分からない。

では、松江鱸とはどんな魚であろうか。『漢字源』を見ると、《【松江鱸】シヨウコウノ 呉松ウーソ江でとれるすずきに似た魚。おいしいことで名高い。》とある。実は、共通点は鱸という名のみで、松江鱸の姿は鱸というより宍道湖の牛頭(ゴズ)に似るが3頭身で太め【写真】。鰓(えら)の前に擬鰓があつて四つ鰓(エラ)に見えるところから、地元では四鰓鱸(sisāilú シサイロ)の俗称がある。鱸にも擬鰓がある写真を見たことがある。松江鱸の専売特許ではないようだ。

松江鱸は、稚魚は海で生まれて川を遡上し、産卵の時だけ海に下るという降河回遊の生活史をもつ。上海市編松江県志の中にその生活史を活写した次の一節がある。

《松江鱸は東(シナ)海から大江小河を歴遊し松江に至り、先ず松江市街の西、秀野橋下に集結、再び大小河道に赴く。この古くて美しい童話のような伝説は秀野橋の魅力を語り、秀野橋河畔の生物圏と“鱸魚公寓(マンション)”の独特な環境を示している。(……)秀野橋は又松江市街西部の商業と貿易業が混在する地区にあり、商店が林立し人烟が輻輳していた。経済の発展により、橋台及び河畔は全て石を積んで護岸としたので、石積護岸の世界とその迷宮が出来上がっていた。これらの石積護岸は長年の浸食により、目地が剥落し数多の隙間とウロ(洞)が形成され、これらの洞穴が四鰓鱸の“城池公寓”になったのである。黄浦江の来潮時には、瀋涇塘、油墩港、大漲涇の三水が“三秀橋(秀野橋含む3姉妹橋)”の一带に集合する。流れは急で渦巻も多く、潮が湧き上がっては互いに混ざり合い、富栄養物が群れ集まる。それにつれ魚やエビなどが集中して、四鰓鱸の“美食府”となったのである。河畔の住宅と軒を連ねたもっぱら四鰓鱸を調理することが売りの旅館が川に捨てる糞(アツモ)の余りや残飯が、水中の各色のプランクトン、ミジンコ、アサリ、アミエビの類、タナゴ等を養育し、四鰓鱸の美食を支える。鱸たちは貪婪に食べて飽きることはない。東天の際に曙光が射す頃やっとおくびを鳴らして“城池公寓”に戻るという有様であった。こんな調子で日に日に高脂肪高蛋白を摂取して成長し、ひと月で体重が三・四倍にもなり、太って腰が丸々になる。四鰓鱸は通の“旅人”で、うまいものがあれば、またよい住処があれば、すぐそこに移るといった具合で、秀野橋地区が鱸たちの理想のたまり場になった。そこで、秀野橋下の四鰓鱸が名を四方に轟かすこととなったのである。》

北宋の蘇軾(東坡, 1037~1101)は、「後赤壁賦」の中で「巨口細鱗にして、状は松江の鱸のごとし(巨口細鱗、状如松江之鱸)」と詠み、杜甫や李白などの錚々たる文人墨客も詩情画意を松江鱸に託してきた。他方、魏の曹操(155~220)を嚆矢として隋の煬帝(604~618)、最後に松江

鱸を食した国家主席李先念に至るまで多くの人々はその美味を称賛してきた。中には外国の賓客もいる。ニクソン大統領訪中の宴席で周恩来が自ら作ったメニューに松江鱸を加え大統領に振舞い(1972)、帰国後ニクソンはその美味を改めて絶賛したという。エリザベス女王の訪中(1986)では魚名を「ニクソンの魚」として所望されたが、時すでに遅く魚影は江南の水域から消えていた。原因は水質悪化とは知るが、今年の『新聞晨报』(2012.2.8 付)に「前世紀の50年代から60年代初めにかけて、松江で住血吸虫病撲滅運動と水利事業が大々的に行われて以降、四鰓鱸魚は一気に跡形もなく消えた」と、より踏み込んだ記事があった。では、松江県志に今も載る総面積 605.58 km²(東京 23 区 621 km²)、水域面積 90635 畝 (≒60.42 km²、山手線内側 69 km²)、大小 3905 条の河川はどうなったのか。睡蓮(スイレン)科の蓴菜(ジュンサイ)が 1999 年に国家一級重点保護野生植物になるようでは、沼などの水域が激減しているものと思う。

松江鱸の復活を目指し70年代に続き2000年に再発足した復旦大学松江鱸プロジェクトチーム主任の王金秋教授は、去年正月、「プロジェクトは目下四鰓鱸の野生放流に必要な繁殖作業を完了し、辰山植物園内の河道を四鰓鱸の野外生存と生長に適合させる初歩的な試みを行っている。」と『新民晩報(上海)』の記者に語った。辰山とは松江九峰の一つ佘山(shéshān シヤザン)山系にある海拔71mの孤峰。彼女はさらに、「但し、四鰓鱸の野生放流は一つのシステムのプロセスであり、政府部門の支持と参加が必要である」としたうえで、関係部門が内陸河道の環境整備への取り組みを強め、四鰓鱸の放流面積と規模の拡大に資するようにと率直に語った、とある。なお鱸郷一帯については、「倉城歴史文化風貌区保護性開発」と規定し、「秀野橋の修復と玉村路老市街に至る河道兩岸の石積護岸の修築、相対的に密集した埠頭と漕運波止場の設置、北岸の河沿い長廊景觀の再建、淤泥(オデイ)の浚渫、唐代の古い河道と明清の漕運風貌の再現、大倉橋西側の歴史景觀の修復」(松江区委 2009)との整備方針である。

鱸と松江の名と体

近世日本でも松江鱸の令名は聞こえていた。貝原益軒(1630~1714)の主著『大和本草(1709)』卷之十三にその記述がある。原書の片仮名を平仮名に換え句読点を入れた([]は原文のルビ)。

≪【河鱸】海鱸と形状同じ味甚美なり。海鱸にまさり。夏秋尤多して味よし。其大なる者三四尺計(ハカ)、小なる者六七寸あるをセイゴと云、一尺内外なるをハクラと云。味甚美なり。小者性かろし。中夏松江の鱸も河鱸也。長数寸と本草にいへり。セイゴとは松江[セウゴウ]なるべし。【鱸-魚[キ]】大なる者二三尺。三月以後七月まで肥ゆ。暑月多くの味よし。八月よりや(瘠)する。夏秋さしみ鱸(ナマス)とし鮓(ズシ)とす。夏月腸(ハラワタ)の味よし。クモワタと云。腸あり脂多く味□病人忌之。小なるをセイゴと云う。松江[セウゴウ]なるべし。中華松[ズン]-江の鱸は其の大きさ日本のセイゴの如しと云う。中華の鱸は小なり。本草にの(載)する處、長さ僅かに数寸とあり。○河鱸味尤もよし暑月の佳品なり。出雲の松江[マツエ]の湖の鱸味尤もすぐれたり。海と河との間にあるも味よし。漁人釣之或は戈(ホコ)にてつきてとる。≫

セイゴは出世魚スズキの幼少時の呼び名であるが、益軒は名前を松江[セウゴウ]から来たとする。小なる者であるが鱸に変わりないと考えたのであろう。松江鱸の大きさは15cm以下だから六七寸あるセイゴは大きすぎ。ところで、「本草」とは、明の著名な医家李時珍の『本草綱目』のことで1596年に南京で上梓されている。現代版本草の『中薬大辞典(1986)』には、

《李時珍は鱸が松江の四鰓魚（杜父魚科松江鱸魚 *Trachidermus fasciatus* Heckel）だと見做しているが、その根拠とした“状は鱸魚にやや似て色白、黒点あり、巨口細鱗”等の特質は、まさに鮭科の鱸魚で、松江鱸魚ではない。》とある。鮭はヒレか魚名のハタ。鮭科は *Serranidae* で、英和辞書ではスズキとあるが専門用語としてはハタ科となる。杜父魚科はカジカ科。中国語 Wikipedia『維基百科』には《松江鱸 *Trachidermus fasciatus*（ヤマノカミ、山の神(両者とも原文)）》とある。松江鱸＝山の神であるが、中国が鱸形(スズキ)目 *Perciformes* であるのに対して日本ではカサゴ目 *Scorpaeniformes*。松江鱸は明人が混同し綱目は今もこれだから、益軒が戸惑うのも無理はない。益軒は筑前生まれの福岡藩士である。絶滅危惧種とされる山の神が今唯一棲む有明海に筑後川が流れ込む。筑後川上流の別称上座川に、川鱸これありと自著『筑前国続風土記』に載る。別項に杜父魚はハゼに似るという記述もある。山の神も見たに違いないが、目に山の神＝松江鱸の図式なく看過したようだ。松江命名者の見え方も益軒と同じであろう。ところでスズキ目の科レベルの多様化はジュラ紀と白亜紀との境界付近で起きたらしいから、鱸と松江鱸が分岐したのがその頃か、また山の神がカサゴ目なら恐竜時代か。



【写真】左は、北方の松花江などで捕獲し繁殖に成功した鱸形(スズキ)目杜父魚科松江鱸(CCTV映像)。右はジャノメコオリウオ。スズキ目ナンキョクカジカ亜目コオリウオ科、南極半島周辺に棲む。全長約 55 cm。(葛西臨海水族園)。

大和本草から一世紀ほど下った小野蘭山(1729～1810)の『本草綱目啓蒙(1803)』巻四十に、「鱸魚 スジユキ スズキ〔一名〕松江魚」という見出しで松江の名称の由来が書かれている。

《江鱸(寧波府志)ト云。正字通二、天下之鱸皆兩鰓、惟松江鱸四鰓ト云。(……)然レドモ惟雲州松江鱸名産ナリ。味モマサレリ。(……)、雲州ノ鱸魚ヲ産スルコト尚シ。雲州ノ城下ヲ松江ト云、マタ呉松城トイフ。鱸魚ニヨリテ呉ノ松江ノ名ヲトレルモノナリ。》(東洋文庫)

既に江戸初中期を代表する碩学、新井白石(1657～1725)の覚書及び談話を編集した『白石先生紳書』巻七には、「今の松江の城をば縄張して鱸の名所也とて松江と名付しは甫庵也」の一文がある。甫庵とは松江城築造の全工程の指揮をとった参謀、小瀬甫庵(オセアンのこと)である。甫庵は儒医で武略文才の人。「甫庵版」と呼ばれる原書の刊行にも力を入れ、明の虞搏撰『新編医学正伝』などを出版(1597)。これは明の嘉靖刊本を、甫庵が最新技術の木活字をもって翻印したもので、『本草綱目』が南京で出版された翌年である。そこまで出版事情に通じた甫庵なら『本草綱目』(渡来 1607?)を松江命名の 1607 年(島田前掲書)までに入手し読んでいてもおかしくない。後に、『太閤記』や『信長記』という刊本のベストセラーを著わすほどの甫庵なら、漢籍に載る松江鱸やその逸話はもとより、本朝は『平家物語』巻一熊野詣の舟に飛び込んだ鱸の瑞兆譚に至るまで精通していたに違いない。

天地開闢を再現する聖なる開府には、江戸開府における天海僧正、わけでも元の大都(現北京)の開府を指揮した漢人の還俗僧、劉秉忠^{りゅうへいちゅう}の如き元型的参謀が欠かせない。『元史』劉秉忠伝によると、秉忠は儒・道・仏の三教を総合し、天文・地理(風水)や卜筮の術にいたるまで精通しないものない大学者として、フビライの厚い信任を受けている。甫庵に秉忠や天海と共通する素養があればこそ、城地の選定や縄張りの全権を委ねられたのであろうし、

とりわけ風水地理の素養は、その全権を全うするのに不可欠であったろう。ただ、兩人と異なり甫庵には僧歴がなく履歴上「仏」を欠く。そこで、瑞応寺（今の天倫寺）の住職春龍和尚がこれを補い、ここに開府時の元型的人物が成立する、と考えたい。なお、春龍については、吉晴公と遠州浜松時代から深い関係があり、『圓成寺権輿』に「春龍が城下の開闢のとき、吉晴の命によって、鱸魚と蓴菜とが有ることによって松江と名付けた」（島田前掲書）と見える。鱸蓴或は蓴鱸はしばしば一対で、南宋・陸游の「故郷帰去来，歳晩思鱸蓴（故郷帰りなんいざ，歳晩鱸蓴を思う。）」や江戸・武田君玉の「帰心不為蓴鱸美，衰白慈親在故郷（帰心蓴鱸の美なるが為ならず，衰白の慈親故郷に在り。）」などがある。陶淵明「帰去来辞」の田園風景を髣髴させる。わが国の蓴菜は、万葉集に「我(ア)が心 ゆたにたゆたに 浮き蓴(ヌワ) 辺(ハ)にも沖にも 寄りかつましじ」とある。古くから詩情画意の象徴であったのだろう。

名は体を表すと言う。松江という名と体は漢字文化圏においては共通である。『漢字源』によると「松は常緑であるところから、節操・長寿・繁茂などのたとえにつかう。」、また江は「海や湖の水が陸地に入りこんだところ。(……)工は、上下の面に穴をあけてつき通すことをあらわす指事文字。江は(……)、つき通す意味を含む。」とある。このイメージは鱸にも重なる。『大言海』に、鱸の訓読みは「進(す)く進(す)くの意。“進(すす)き”の意か」とある。鱸は直進するように泳ぐ。松江の地名と鱸との象徴的相性の良さが分る。上述の意味を敷衍して、何泉達(「松江歴史和松江府建置沿革述略」2005)は、松は宏大、一人抜き出るという挺拔(テイハツ)の気性のほか対象の神々しさの形容に用いるとし、江は、激しく石や水がぶつかって飛びちる氣勢に困り人をして肅然と惧(オ)れさせるという意味があると指摘する。そして「松江」の広大無辺の氣勢について「地脉は四達し、衍(ノ)びて松江と為す。(……)雲氣に乗り、飛龍を御す。」という程俱(1078~1144)の『松江賦』の一節を援用する。

松江府一帯はもと東シナ海の灘にできた大潮の溝で太湖の形成につれて排水河道となり、紀元前後の漢代にその伸びやかな恢弘(カイコウ)の氣勢に困って松江の名を得たと言う。川の名が同時に地名であった(同上)。わが松江の地名もこれに似る。開府当時の松江には、入海が床几山の麓まで伸びていた。白潟や灘、横浜、津田という三水町名がそれを物語っている。白潟や津田の松原も白砂青松の皆生海岸と一続きであったろう。松江が美しいのは松江の原風景が美しいからである。鉄道が開通する前の天神川や津田の松原の写真が残っている。宍道湖・中海の両潟湖と日本海の自然史的ダイナミズムが生んだ排水河道。その名残を留める往時の天神川には原風景の美が露頭する。松江の命名は、まず第一に原風景の語る言葉に耳を傾け漢籍の教養がこの名に仕上げたのである。このような汽水域の環境はまた降河回遊の鱸を呼び込み、鱸は松江の原風景の象徴ともなった。一方松江鱸は「松江」で絶滅したが、「松江人」の象徴であり続け、絶えずその復活の努力を生んでいる。松江鱸＝山の神は元来丈夫だが、鱸と違い塩分変化への適応力が弱く稚魚の遡上力が潮頼みで環境変化に弱い。鱸が沿岸の生態系の頂点に立つ魚となったのに対し、山の神は今や絶滅危惧種となっている。

終戦直後の超食糧難時代に閣議決定(1945)された「緊急開拓事業実施要領」、それに基づき5つの汽水域 — 岡山県の児島湾、秋田県の八郎潟、石川県の河北潟、長崎県の諫早湾、そして中海・宍道湖で事業が計画され、前3事業は既に完成した。80年代、諫早湾干拓では山の神絶滅への道をひた走っていた。中海・宍道湖干拓淡水化事業では、松高の先輩や同期生が潟湖を守る論陣を張っていた。終に先輩の竹下登首相が国会で「県民全体のニーズが大変に変わってきたという現実は無視できない」と答弁(88)、中海・宍道湖は凍結から干拓の中止(2000)、淡水化の中止(2002)そしてラムサール条約登録(2005)へと邁進する。湖都・松江は、命ある山河を世代から世代へと繋いだ。松江の山河は鱸など宍道湖七珍に象徴される。象徴

はまた力であり、象徴を育む山河を護る強い意思を生む。松江がなお美しい所以である。

(了)